

日刊工業新聞電子版 平成 28 年 (2016 年) 10 月 28 日付記事より

転載許可

承認番号:N-6895 2016 年 11 月 18 日から 1 年間(2017 年 11 月 17 日)

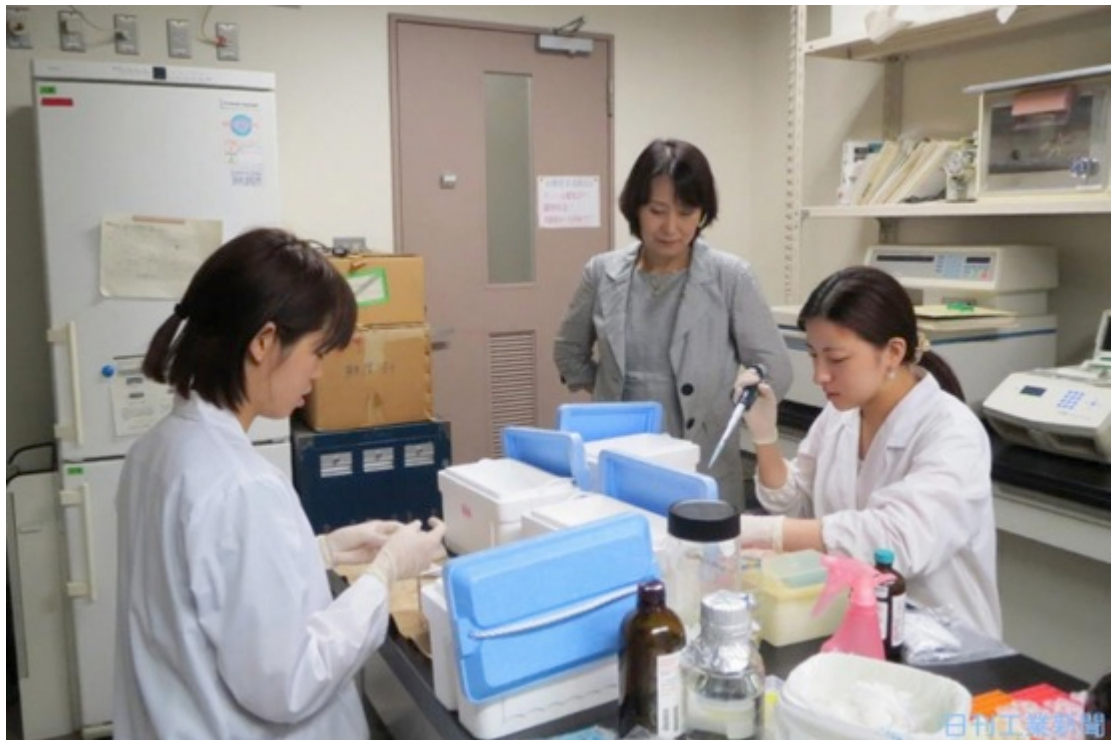
深層断面／女性研究者の「女性賞」は有効か—学協会、支援のあり方探る | トピックス ニュース | 日刊工業新聞 電子版

[トピックス]

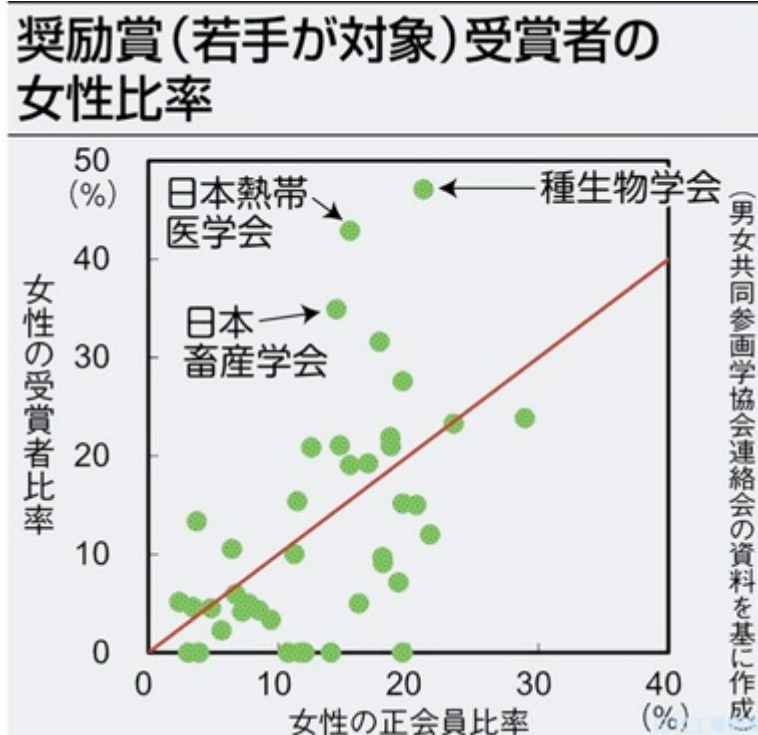
深層断面／女性研究者の「女性賞」は有効か—学協会、支援のあり方探る

(2016/10/28 05:00)

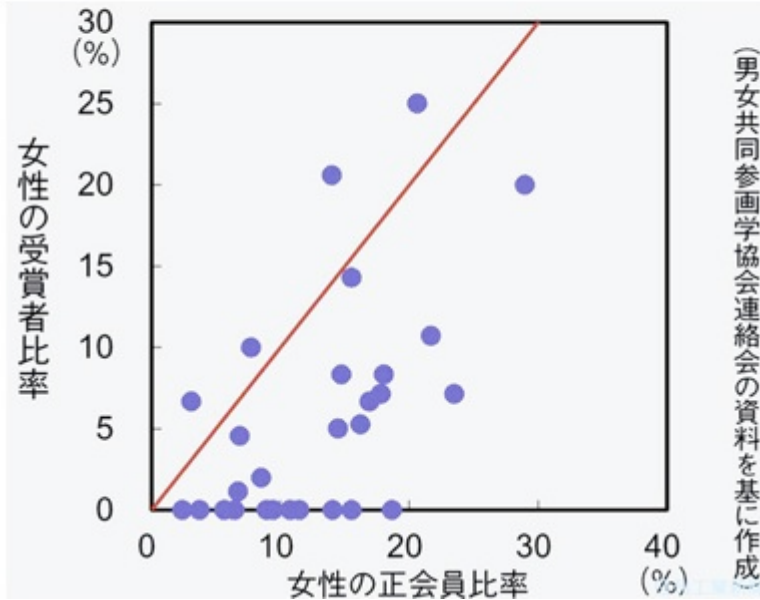
「女性限定の賞は女性活躍推進に有効か」「それでは逆差別になる上、価値の低い賞にならないか」。約90の自然科学系の学協会に横串を刺す「男女共同参画学協会連絡会」の10月8日のシンポジウムで、学会の女性賞についての分科会が注目された。研究者の業績は論文など比較的、客観的に評価できるが、そもそも工学系では女性研究者の比率が低いなど一筋縄ではいかない。学協会が分野の壁を越え、女性研究者の支援のあり方を探っている。(編集委員・山本佳世子)



若手育成で女性研究者を増やす(お茶の水女子大)



研究賞(顕著な業績が対象)の女性比率



受賞が強い励みに

【4%の狭き門】

男女共同参画学協会連絡会は、学会賞受賞者についてアンケートし、45学会(回答率50%)の結果を速報した。複数の若手研究者を選ぶ「奨励賞」では全受賞者中、女性は10%で、女性会員の比率と女性受賞者の比率に正比例の傾向があった。しかし顕著な研究業績を対象とする「研究賞」では全受賞者中、女性は4%と狭き門だ。

新領域の小規模学会は受賞者の女性比率が高い。しかし「大規模で伝統ある古い学会では、女性会員比率が10—20%でも、研究賞の受賞者がいないという傾向がある」と、とりまとめた北川尚美東北大学准教授は説明する。

日本の研究者に占める女性の比率は人文社会系、企業勤務も合わせて15%。男女アンバランスを積極的に改善する一つの方策が、表彰対象を女性に絞った女性賞だ。実際に女性賞を持つ学会は、分野を問わない「日本女性科学者の会」を筆頭に六つある。日本生理学会の女性賞の場合、子どもがなく資産にこだわらない研究者夫婦の寄付を原資に、10年限定で走らせている。また日本農芸化学会は若手向け、企業

向けと合わせて一気に三つの女性賞を、2017年に創設する計画で準備を進めている。

【“見える化”】

各学会とも、創設の検討時には「通常の賞の選考に漏れ、別枠の賞をもらって本人はうれしいのか」「当初はともかく、適任の候補者が年を追うごとにいなくなるのでは」など否定的な意見が多数あったという。議論を経て認識されるようになってきた女性賞の意義は、大きく2点ある。一つは受賞の公表や受賞講演により、少数派で埋もれている女性研究者の“見える化”が進むこと。もう一つは研究奨励金などで受賞者が実質的な支援を得られることだ。

日本化学会フェローである産業技術総合研究所の相馬芳枝名誉リサーチャーはさらに、「所属組織の外から評価され、何事にも勇気を持って取り組めるようになる」という受賞者の心理的なメリットを重視する。自身も44歳で「女性科学者に明るい未来をの会」の猿橋賞を受賞し、自信が持てたという。

受賞後は、管理職への昇進、大型研究予算の獲得、学会の役員就任と活躍につながった。子育てなどで十分な研究時間を取れず、後ろめたさがある女性にとって、受賞は男性以上に強い励みになる。「女性向けでも何でも受賞は効果がある」（相馬名誉リサーチャー）。「女性」の区分けを積極的に活用することをアドバイスする。

【“点在”状態】

日本動物学会会員の産総研の沓掛磨也子企画主幹は、博士研究員らを対象とした女性賞を30代で、その後に奨励賞を40代で受賞した。「学会に見守ってもらっている」という思いを持ったという。年長の研究者には「若手が業績を上げた後などよいタイミングで、賞の応募を後押しをしてあげてほしい」と要望。一方で「こんな人が受賞したんだと思われるように」と年少研究者の視線も意識している。

研究者の仕事は孤独なものが多く、絶対数が少ない女性は“点在”状態だ。受賞を機に学会など研究コミュニティにおける役割を意識するようになったという声は、いくつも聞かれた。「受賞前は自分の仕事、研究にしか関心がなかった。それが受賞により、女性活躍の役に立ちたいと目覚めた」（化学工学会会員の藤岡恵子ファンクショナル・フルイッド社長）という具合だ。

女性のための賞がある学協会

学会名	創設年	15年までの受賞者数
日本女性科学者の会	1996	42
日本動物学会	2001	20
日本生理学会	10	6
応用物理学会	〃	13
化学工学会	11	10
日本化学会	12	8
日本農芸化学会	17	

男女共同参画学協会連絡会の資料を基に作成



男女共同参画学協会連絡会のシンポジウムには約200人が参加した

■基本は研究業績だが…状況に配慮を

パネル討論では、「ライフイベントで慌ただしい女性には、40歳未満という年齢制限は向かない」「他薦では推薦状の依頼に気兼ねが生じるため、自薦も可とした」など、選考に当たって、女性の状況に配慮した工夫が紹介された。

一方で「ワークライフバランスの評価」という難題も横たわる。「基本は研究業績だが、評価が同等の時は背景的なものを考慮している」という学会側に対し、聴講者が「子どもの数と論文の数の両方を見るのか」といった刺激的な意見を投げかける場面もあった。女性賞創設を検討中の学会をはじめ、改善を重ねながらの状況であることが、印象づけられた。

一方、シンポジウムのもう一つの分科会「アンコンシャス・バイアス(無意識の偏見)」もユニークだ。人が育ちや経験の中で、自覚なしに刻み込まれた性別、人種、貧富などに対する固定観念は、人を評価する時にしばしば顔を出す。沖縄科学技術大学院大学(OIST)のマチ・ディルワース副学長は、「評価者が疲れたり急いだりしている時、グループに少数の特徴的な人が目立つ時、業績情報が十分でない時などにバイアスがかかりやすい」と講演した。

そのため人事を議論する場ではこのような状況を避ける必要がある。「欧米の大学では、教員の採用や昇進に関わる人向けに、アンコンシャス・バイアスの研修義務化が進んでいる」というディルワース副学長の発言に、質問の手がいくつも挙がった。

これに対してOISTでも15年から義務化したこと、ウェブ上で英語の研修教材が入手できることなどを紹介した。

同連絡会の小川温子委員長(お茶の水女子大学理事)は「会の役割は、学協会によって温度差のある意識の啓発や情報の共有化だ」と強調する。過去には育児休業を分割取得する手法の先行例を紹介し、他の大学に広がった実績もある。政府の後押しに加え、現場の女性研究者ネットワークによって、状況が大きく改善することが期待されている。